

タイトル	ソウル大学蔵『源氏物語』須磨巻の翻刻と考察(上)): 漢字使用率と本文の系統
著者	保坂, 智; 呉, 美寧
引用	北海商科大学論集, 8(1): 10-32
発行日	2019-02

ソウル大学蔵『源氏物語』須磨巻の翻刻と考察(上)：漢字使用率と本文の系統
A Reproduction and Study on the First Part of the Suma Volumes of
“Genji Monogatari” Housed at the Seoul National University
(Part I: Kanji Usage Rate and Text Lineage)

保坂 智 HOSAKA, Satoshi 呉 美寧 OH, Miyoung

要旨

本稿は、ソウル大学校中央図書館に所蔵されている『源氏物語』須磨巻前半部分の翻刻とその本文の特徴を考察したものである。このソウル大学蔵『源氏物語』は、日本の学界にまだ詳細が紹介されていない。そのため、最も書き入れが多い須磨巻を翻刻し紹介するとともに、その本文の特徴や系統を考察した。翻刻と調査の結果、漢字の使用法および振り仮名のつけ方に特徴があること、本文は三条西家証本とされる日本大学蔵『源氏物語』に近いこと、平仮名に漢字を当てる箇所が多く漢字使用率は19.1%に及ぶことが判明した。以上から、ソウル大本は江戸期における『源氏物語』受容の一端を窺い知ることができる高度学習本として独自の価値を有することが明確になった。

キーワード：『源氏物語』、ソウル大学、漢字使用率

Abstract

This paper is the first part in a two-part series. In this series, the first part of the Suma volumes of “Genji Monogatari”, housed in the central library of the Seoul National University were reprinted and its characteristics examined. This reprinting of the Seoul National University collection “Genji Monogatari” represents the first time this collection has been introduced to the Japanese academic community. The Suma volumes, which contain more writings than any other volumes, were examined to determine their characteristics, kanji usage rate, and the lineage of the text. This study revealed that the words contained in the Suma volumes were identical to those contained in the collection of Nihon University's “Genji Monogatari” (also known as the Sanjo Nishike Books). However, while the text of the Seoul collection contained a mixture of both kanji and kana, the Nihon University collection was written mainly in hiragana. Another finding was that there are many parts in the Suma volumes where Hiragana is replaced with Kanji and the usage rate of this Kanji was found to be 19.1%. Based on these above features, it is clear that the Seoul National University collection of “Genji Monogatari” had value in the Edo period as a book for self-learning.

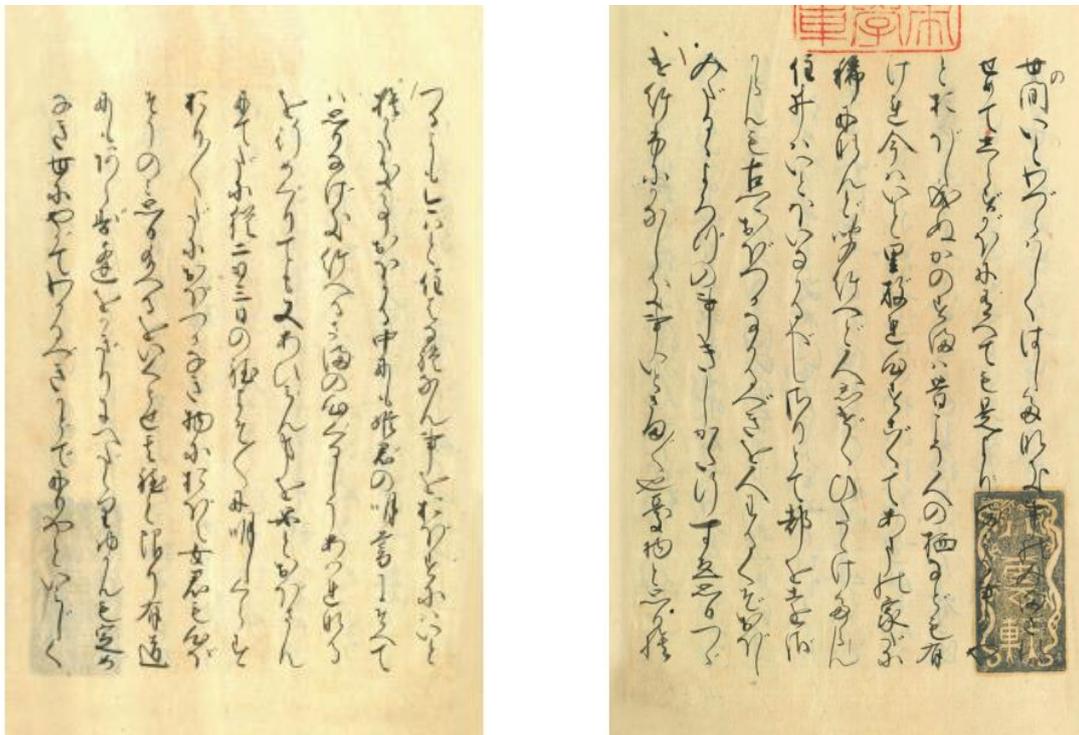
Keywords: “Genji Monogatari”, Seoul National University, Kanji usage rate

1. はじめに

韓国のソウル大学校中央図書館には『源氏物語』の写本が所蔵されているが、詳細はまだ日本の学会に紹介されていない¹⁾。今回ソウル大学教授李丞宰先生のご高配のもと、斎藤達哉氏（専修大学）、渡辺さゆり氏（札幌大学）、鴻野知暁氏（東京大学）らとともに調査する機会を得た²⁾。本稿は須磨巻前半を翻刻し、その本文を考察するものである³⁾。

このソウル大学蔵『源氏物語』(以下、ソウル大本) について、呉美寧「ソウル大学蔵『源氏物語』の書き込みについて」⁴⁾が書誌情報も紹介しており、詳しくはそちらに拠りたい。要点のみ記しておく、ソウル大本は巻1 桐壺と巻28 野分を除く零本52冊、横24cm 縦17.5cm の和装である。書写者は未詳だが、「八雲軒」などの印から脇坂安元（1584～1653）旧蔵であったとみられる。脇坂安元は従五位下の淡路守であった人物で、武家第一の歌人ともされ、徳川秀忠の談伴衆でもあった。本文の特徴として漢字使用率の高さと書き込みの多さが挙げられる。多量の書き込みがいつなされたかは不明だが、「書かれた本文を声に出して読む際に、正確に読ませるために付けられたもの」と考えられ、内容の理解を容易にする漢字使用と合わせ「高度学習本というべきもの」とされている。

本稿の目的は、前掲呉論文で扱われていないソウル大本の系統を明らかにすることにある。書き入れが多い須磨巻に焦点を絞り⁵⁾、具体的な漢字使用を検証するとともに、どのような系統の本文なのかを考察をする。また、翻刻を付すことで、ソウル大本の存在そのものを日本において広く紹介することも目的としている。



〈図1〉ソウル大本須磨巻1丁表裏

2. 漢字使用率

まず、ソウル大本の大きな特徴の一つである漢字使用率の高さ⁶⁾を見ていく。もともと平安時代の仮名作品は女性の手になるものが多く、平仮名で書かれるのが原則である。たとえば、青谿書屋本『土佐日記』は貫之自筆本の体裁を伝えていると言われるが、その中で日付を除くと全文 1250 字の中で漢字はわずか 60 字程度、使用率 4.8%程度である。漢字表記されるものは「日記」などの漢語で、仮名による入声・促音の表記方法が確立していないものなどに限られる。こうした「口語、和語、平仮名」⁷⁾で特徴づけられる和文体の一つに物語があり、『源氏物語』も平仮名で書写されていくことになる。平安鎌倉時代の古写本に比べ、大島本をはじめ室町期写本は漢字を当てて書写する傾向にある⁸⁾。とはいえ、江戸時代の版本においても漢字使用率は低く、簡単な「人」「世」など以外の漢字が使用される際には振り仮名で読み方が示されるのが一般的であった。試みに、須磨巻の1丁の表裏の漢字使用率を版本も含めて計算したものが下記の〈表1〉である。

〈表1〉各本の須磨巻1丁表裏の漢字使用率⁹⁾

ソウル大本				絵入(1654年)			
丁数	総字数	漢字数	漢字使用率	丁数	総字数	漢字数	漢字使用率
1才	191	36	18.8	1才	230	20	8.7
1ウ	193	38	19.7	1ウ	242	26	10.7
計	384	74	19.3	計	472	46	9.7

日本大学蔵三条西家証本(1531年)				湖月抄(1673年)			
丁数	総字数	漢字数	漢字使用率	丁数	総字数	漢字数	漢字使用率
1才	163	8	4.9	1才	219	20	9.1
1ウ	155	11	7.1	1ウ	89	9	10.1
計	318	19	6.0	計	308	29	9.4

大島本				首書(1673年)			
丁数	総字数	漢字数	漢字使用率	丁数	総字数	漢字数	漢字使用率
1才	186	6	3.2	1才	188	11	5.9
1ウ	192	15	7.8	1ウ	182	15	8.2
計	378	21	11.0	計	370	26	7.0

ソウル大本の漢字使用率の高さが突出している。〈図1〉および翻刻からわかるように、具体的には「栖」「稀」「憂」「必」などの漢字が当てられ、「よのなか」を「世間」と表記するなど他に例を見ない使用法である。須磨巻に限り、すべての丁における漢字使用率を調査したものが〈表2〉¹⁰⁾となる。結果、丁ごとの平均 19.1%であり、最後まで江戸時代の版本の倍に相当する高い値を示すことが判明した。また、その数字は日本大学蔵三条西家証本（以下、日大本）の3倍にもものぼる。後述する通り、日大本はソウル大本の親本と考えられるのだが、一方で傍記等もほぼ同じように書写しながら、他方で平仮名に漢字に当てていったことが知られるのである。

〈表2〉 ソウル大本の丁ごとの漢字使用率

丁数	総字数	漢字数	漢字使用率
1才	191	36	18.8
1ウ	193	38	19.7
2才	198	33	16.7
2ウ	197	44	22.3
3才	188	42	22.3
3ウ	189	32	16.9
4才	192	38	19.8
4ウ	196	28	14.3
5才	191	43	22.5
5ウ	185	30	16.2
6才	184	47	25.5
6ウ	188	38	20.2
7才	170	33	19.4
7ウ	192	42	21.9
8才	168	25	14.9
8ウ	192	23	12.0
9才	194	25	12.9
9ウ	188	24	12.8
10才	188	34	18.1
10ウ	182	33	18.1
11才	168	26	15.5
11ウ	190	38	20.0
12才	190	31	16.3
12ウ	195	34	17.4
13才	170	29	17.1
13ウ	195	38	19.5
14才	198	36	18.2
14ウ	173	26	15.0
15才	194	38	19.6
15ウ	188	38	20.2
16才	192	37	19.3
16ウ	170	40	23.5
17才	189	35	18.5
17ウ	181	40	22.1
18才	173	43	24.9
18ウ	175	38	21.7
19才	196	42	21.4
19ウ	209	38	18.2
20才	198	36	18.2
20ウ	198	36	18.2
21才	179	33	18.4
21ウ	197	33	16.8
22才	184	43	23.4
22ウ	191	36	18.8
23才	178	46	25.8
23ウ	188	48	25.5
24才	188	33	17.6
24ウ	189	37	19.6

丁数	総字数	漢字数	漢字使用率
25才	185	29	15.7
25ウ	170	23	13.5
26才	166	38	22.9
26ウ	190	26	13.7
27才	190	31	16.3
27ウ	162	34	21.0
28才	200	42	21.0
28ウ	163	19	11.7
29才	191	38	19.9
29ウ	197	44	22.3
30才	196	38	19.4
30ウ	194	33	17.0
31才	190	48	25.3
31ウ	200	26	13.0
32才	200	39	19.5
32ウ	190	54	28.4
33才	165	42	25.5
33ウ	192	38	19.8
34才	187	61	32.6
34ウ	179	40	22.3
35才	197	52	26.4
35ウ	186	39	21.0
36才	184	35	19.0
36ウ	195	42	21.5
37才	197	31	15.7
37ウ	196	33	16.8
38才	172	45	26.2
38ウ	180	32	17.8
39才	197	37	18.8
39ウ	195	31	15.9
40才	196	24	12.2
40ウ	183	41	22.4
41才	190	35	18.4
41ウ	179	51	28.5
42才	177	38	21.5
42ウ	188	26	13.8
43才	193	35	18.1
43ウ	194	34	17.5
44才	169	35	20.7
44ウ	193	35	18.1
45才	187	33	17.6
45ウ	177	28	15.8
46才	176	28	15.9
46ウ	191	20	10.5
47才	195	18	9.2
47ウ	7	0	0.0
計	187.1	35.7	19.1

今回翻刻した範囲での特徴的な具体例を示しておく。

〈表3〉ソウル大本 漢字表記の例

	位置	本文
①	5ウ8	かゝるたぐひおほふ侍気くハンベリケリ
②	8オ9	吾御かたの人々
③	10オ6	音徒聞え給はず
④	13ウ5	さるべき文ども文 “集 “など
⑤	16ウ6	月待出て出給御供にたゝ五六人斗
⑥	18オ7	雲隠ぬる明果る程に帰給く補入ひて
⑦	18ウ1	又参給らず成ぬる南
⑧	18ウ5	桜の散透たる枝に付給へり
⑨	21ウ6	うら山しくもと打ずんじ給へる

①の「侍気」には「ハンベリケリ」の振り仮名があるおかげでかろうじて読める。②「吾御かた」③「音徒」も「わが御方」、「おとづれ」と読めるものの文脈を理解していないと難しい。これらも通常であれば振り仮名が付されるべきところだろう。④「文 “集 “」は二語ともに濁点が付されており、珍しい例である。⑤⑥は送り仮名が省略されており、漢字の多用が印象付けられる。⑦「南」は係助詞「なん」、⑨「うら山しく」は形容詞「うらやまし」の一部に漢字が当てられており、注目に値する。一方で、⑧「散透きたる枝」は意味を踏まえて漢字を当てているようである¹¹⁾。このように理解しやすさを追求しての漢字使用とばかりは言えず、当て字や助詞等の省略によりかえって意味が通じづらくなっており、漢字使用率の高さだけでなく、その用法も特徴的であることがわかる。

3. 異本注記

次に、異本注記に注目し本文を考察する。異本注記は須磨巻全体で10例、補入によるのも含めると全12例となる。『源氏物語大成』¹²⁾を用いて同じ本文をもつ諸本とともに示したのが、〈表4〉である。

もとの本文は、青表紙本¹³⁾の系統であることがわかる。⑤については「かからぬおりならは」もしくは「かかるおりならすは」のように打消が一つ入らなければ文意が通じないところである。もともと「かゝるおりならすは」であり、後から「す」を誤って見せ消ちにしたかと思われる。この例に限らず、書き入れ前の本文は青表紙本の中でも三条西家本¹⁴⁾＝日大本とほぼ一致する。③の「7」の記号が不明¹⁵⁾だが、この「て」はもとなく異本により補ったことを意味するのであれば、すべてが日大本と同じことになる。



〈図2〉表4の③、⑤の本文

〈表4〉もとの本文と同じ諸本

ソウル大本須磨巻の異本注記

	位置	ソウル大本	対象となる本文	同じ本文をもつ諸本
①	3ウ9	つれ／＼にこもらせ給へらくるイん程	給へらん	【青】大横飯三、【別】陽
②	8ウ8	所／＼引かへしたるくりイみる程だに	引かへしたる	【青】三
③	18ウ2	よろづをしはかりてくイ	をしはかりて	【青】大横池飯肖、【河】七宮尾大、
④	20オ2	しもは数しらぬ(ずイ)を	しもは数しらぬを	【青】全本
⑤	22オ8	かゝるくらぬイおりならず(ミセケチ、はイ)は	かゝるおりならずは	【青】三、※かゝるをりならずは横池飯
⑥	29オ2	御心／＼み給ふにくはイ	み給ふに	【青】三、【河】全本
⑦	38b7	まよくとイひなん	まよひなん	【青】横飯肖三
⑧	42ウ1	おぼしなく(りイ)て	おぼしなして	【青】大横池飯三
⑨	44オ2	はるくわつイかなる(ミセケチ)る	はるかなる	【青】三(はるく補入か)なる)、【河】全本
⑩	44オ7	あかくちきイなくに	あかなくに	全本

ソウル大本須磨巻の補入異本注記

⑪	6ウ1	いとく補入おもイしろき庭に	いとしろき庭に	【青】全本
⑫	29ウ4	おぼしなく補入をイせり	おぼしなせり	【青】肖三、横(おぼしなをくせ)り

〈表4〉にある異本の本文と一致する諸本を示したものが以下の〈表5〉である。しかしながら、いずれの本により異本注記したのかは、これだけでは判断できない¹⁶⁾。たとえば、⑩に関しては『源氏物語別本集成続』¹⁷⁾においても国冬本と日大本に同じような異本注記が見られるだけで、実際に「あちきなく」が本文の写本は見当たらないのだ。⑪の「おもしろき」とあるのは国冬本だけである。ただ、日大本自体に異本注記があることは親疎を考える上で重要なヒントとなる。

〈表5〉異本の本文と同じ諸本

ソウル大本須磨巻の異本注記

	位置	ソウル大本	異本の本文	同じ本文をもつ本文
①	3ウ9	つれ／＼にこもらせ給へらくるイん程	給へる	【青】池肖、【河】全本、【別】御
②	8ウ8	所／＼引かへしたるくりイみる程だに	引かへしたり	【青】大横池飯肖、【河】全本、【別】御
③	18ウ2	よろづをしはかりてくイ	をしはかり	【青】三、【河】平
④	20オ2	数しらぬ(ずイ)を	数しらずを	※しもはたいふへきにもあらず【河】全本、【別】全本
⑤	22オ8	かゝるくらぬイおりならず(ミセケチ、はイ)は	かゝらぬおりならは	【青】大、【河】全本、【別】全本
⑥	29オ2	御心／＼み給ふにくはイ	み給ふは	【青】池飯肖、横(補入は) ※他は「見給ふ」
⑦	38b7	まよくとイひなん	まとひなん	【青】大(まと(よ朱)ひなむ、池、【河】全本、【別】全本
⑧	42ウ1	おぼしなく(りイ)て	おぼしなりて	【青】肖、※【河】思たちて全本、【別】思なして全本
⑨	44オ2	はるくわつイかなる(ミセケチ)る	わつかなる	【青】はつかなる大横池飯肖、【別】全本
⑩	44オ7	あかくちきイなくに	あちきなく	ナシ

ソウル大本須磨巻の補入異本注記

⑪	6ウ1	いとく補入おもイしろき庭に	いとおもしろき庭に	ナシ
⑫	29ウ4	おぼしなく補入をイせり	おぼしなをせり	※おぼしなおり【青】大横池飯、【別】御

〈表4〉〈表5〉を手掛かりに、他の部分を含め該当箇所を日大本と比較した。それが〈表6〉である。

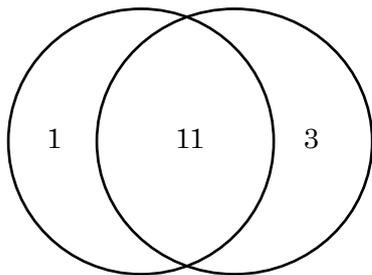
〈表6〉 ソウル大本の異本注記箇所と日大本

	位置	ソウル大本	日大本
①	3ウ9	こもらせ給へらくるイ)ん程	こもらせ給へらんくるイ)ほと
②	8ウ8	引かへしたるくりイ)みる程だに	ひきかへしたるくりイ)みるほとたに
③	18ウ2	をしはかりてくイ)けいし給へ	をしはりく補入てイ)けいし給へ
④	20オ2	数しらぬくずイ)を	かずしらぬくずイ)を
⑤	22オ8	かゝるくらぬイ)おりならずくミセケチ、はイ)は	かゝるくらぬ)おりならずく(は)は
⑥	29オ2	御心／＼み給ふにくはイ)	御ころ／＼みたまふに
⑦	38b7	まよくとイ)ひなん	まよくとイ)ひなん
⑧	42ウ1	おぼしなしくりイ)て	おほしなしくりイ)て
⑨	44オ2	はるくわつイ)かなるくミセケチ)る	はるくわつイ)く補入か)なる
⑩	44オ7	あかちきイ)なくに	あかなくにくちきなくイ)

ソウル大本須磨巻の補入異本注記

⑪	6ウ1	いとく補入おもイ)しろき庭に	いとく補入おもイ)しろきにはに
⑫	29ウ4	おぼしなく補入をイ)せり	おほしなせくをイ)り

⑥以外はすべて日大本の通りであることがわかる。ソウル大本が日大本と共通の祖本によった可能性もあるが、次節で検証するように日大本を直接写した可能性の方が高い。また、漢字使用率の高さなどから日大本の方が早いことは疑いない。⑥は横山本により注を付したことになり、このみ横山本で行った理由が判然としない¹⁸⁾。あるいは、後の書き入れの可能性もあろう。一方の日大本には、補入などを除き「イ」とある異本表記は13例ある。⑤は「イ」の表記はないが、表にある通り傍記で「らぬ」「は」とあり、これも含めると14例になる。つまり、日大本に異本表記がありながら、ソウル大本には記されていないものが3例あることになる。以下の〈図3〉に図示し、〈表7〉にその本文を示す。



ソウル大本 日大本

〈図3〉 異本注記の数

〈表7〉 日大本の異本注記

	日大本	ソウル大本
①	48ウ1 みたてまつりなるゝほと(まゝイ)に	37オ7 見奉なるゝ程に
②	49ウ3 冬に(とイ)なりて	38オ4 冬(フユ)に成て
③	56オ8 身のう(補入れイ)へを	43オ7 身のうれへを

日大本にのみある異本注記のうち①「みたてまつりなるゝほとに」は日大本の独自異文にもかかわらず、ソウル大本は「程」をとる。②も日大本の本文をとる。ちなみに、「冬となり」とある本文は別本の御物本のみである。この2例はあえて異本注記をしなかったのか、見逃したかは不明ではあるが、日大本の本文を優先したといえる。③についてソウル大本は補入した「うれへ」をとる。異本の方をとったことになるが、「うへ」の本文は現存

諸本にはない。「イ」を見逃し単なる補入と考えた可能性もある。というのもソウル大本は、日大本に見せ消ち・補入部分がある場合は多くが直した形で書写されているからである¹⁹⁾。

以上から、共通祖本を日大本とソウル大本がそれぞれに書写したのではなく、書き入れも加わってからの日大本をソウル大本が書写した可能性が高い。

4. 日本大学蔵三条西家証本との比較

ソウル大本と日大本を比較し、漢字と仮名の違い、送り仮名の有無、仮名遣いの違い(い・ひ、を・お、など)や名詞間の「の」の有無(行平の中納言、三位の中將など)を除き、意味が変化する異同箇所を示したものが次の〈表8〉である。須磨巻全体で21箇所あった。

〈表8〉ソウル大本と日大本との異同

	ソウル大		日大本		ソウル大本と同じ諸本
①	1才1	世間	1才1	世中	ナシ
②	1才7	人わるく	1ウ1	人わろく	【青】大横池飯【河】【別】
③	1ウ5	二日三日	2才1	一二日	ナシ
④	2ウ1	さま	2ウ10	さまも	【青】肖【河】【別】
⑤	5ウ6	をかしあるにて	7才6	をかしあるにし(ミセケチ)ても	ナシ (三の独自異文)
⑥	9才	わらはべ	11才8	わらはへは	【青】横飯肖(大はらはへ)
⑦	16ウ4	事共`	21才5	ことゝもゝ	【青】肖
⑧	24ウ3	御傍の	31ウ5	面かげの	【河】
⑨	25才6	つゝましきに	32ウ2	つゝましさに	ナシ
⑩	25ウ2	御心むけ	32ウ9	御をもむけ	【河】
⑪	29才7	ついぢ	37ウ3	ついひち	【青】大(横ついひ(ミセケチ)ち)
⑫	32ウ4	此世の物共	42才5	この世のものと	【青】横肖、【河】七大、【別】
⑬	32ウ8	奥より	42ウ1	おきより	ナシ
⑭	33才3	はへあへる	42ウ9	はえたまへる	ナシ
⑮	35才8	えさふらはぬ殊更に	46才3	えさふらはぬことさらに	【河】
⑯	35ウ3	え立とまらず	46才8	えたちと(補入と)まらず	【青】大池飯
⑰	37才2	あしき事共 `を	48才5	あしきことゝも	ナシ
⑱	39ウ2	くつしいたうて	51ウ2	くんしいたうて	ナシ
⑲	40ウ8	むすめ	53才5	みむすめ	【青】大【河】
⑳	43才6	身のうれへを	56才8	身のう(補入れイ)へを	【青】【河】【別】
㉑	45ウ8	御さまはれに	59ウ5	御さま(補入さる)はれに	ナシ

表から分かる通り、意味が変化するとはいえ、微細な差異にとどまるものばかりで、文意に甚大な影響を与えるものではない。多くがソウル大本の独自異文となっており、踊り字や「も」「は」が落ちるといった書写時の単純な誤りと推測されるものがほとんどである。⑩のみが明らかな語彙の違いとなるが、ここも河内本を見ながらの意識的改変と考えるよりも書写者の語感によるものと考えられそうである。漢字と仮名の違いについても触れておくと、伊藤鉄也氏²⁰⁾が指摘されていた「京」「都」の差異では、日大本で6箇所あった「京」はソウル大本でもすべて「京」、日大本の「宮こ」4例、「みやこ」6例、「都」2例は、ソウル大本ではすべて「都」となっている。このように多くは日大本の仮名をソウ

ル大本が漢字で表記しているのだが、日大本が漢字表記していたものを平仮名にしている場合もままある²¹⁾。

問題はやはり書き入れが書写時のものなのか、何回にもわたるものなのかの見極めだろうが、訂正後の本文が何本に近づいたのかも含め他日を期したい。

5. おわりに

以上、ソウル大本の親本は日大本と考えられる。ただし、日大本通りに厳密に写そうとしておらず、平仮名に積極的に漢字を当てようとした点に特徴がある。その際、意味の理解という観点からでは説明がつかない当て字が含まれている。また、いつの時点かは不明だが、濁点を付し、振り仮名を振りつつ、音読を想定した学習の跡が見られる。とりわけ「御」の読み分けは特筆すべきであろう。こうした書き入れの一方で、本文解釈にかかわる注の書き入れ、たとえば大島本に見られる『花鳥余情』の注のようなものは見当たらない。本文理解よりも声に出して読み上げる際のことを重視しているということだろう。

藤井貞和氏²²⁾は「大島本のかつては青表紙原本を窺えるかもしれない写本として取り上げられてきた意義が、いま失われつつある代わりに、われわれ近代の本文研究や読解の先達である学問本としての性格を、新たに主張しつつあるのではなかろうか」とされ、「地方武士たちの真剣な学芸の成果を覗かせた本」という位置づけも検討されるべきとの見解を示された。ソウル大本も大島本とは力点の置き方が異なるものの学問本として活用された形跡を如実に示す写本と言えよう。若菜上巻以降は書き込みがほぼなくなることから、巻ごとの本文、書き込みの量の多寡と内容の質をより詳細に調べることで、享受のさまもより鮮明になるものと思われる。

6. 翻刻

【凡例】

行移り・丁移り

- 1 本文の行移りは原本にしたがった。
- 2 丁移りは、丁数・表裏を算用数字とオウの形で括弧書きで示した。

文字

- 1 仮名は現行の平仮名を用いた。
- 2 漢字は現行の字体によることを原則とした。
- 3 語を漢字表記にする場合の漢字と、仮名表記にする場合の字母とが、一致する

き

には、漢字として扱った。(例) 見くるし、 気しき

- 4 繰り返し符号は次のように統一した。

仮名一文字の繰り返し (例) こゝち

漢字一文字の繰り返し (例) 人々

ただし、本が「／＼」の場合はそのままにした。
 複数文字の繰り返し (例) ひと／＼

和歌

- 1 和歌は二字下げとした。

傍記等

- 1 傍記は[]で「ミセケチ」、「補入」、「不濁点」を示した。
- 2 ルビは平仮名、片仮名、漢字、それぞれの字体で[]で示した。
- 3 異本注記は[イ]で示した。

(1 オ)

- 1 世[補入の]間いとわづらハしはくしたなき事のみまされハ
- 2 せめてしらずがほに有へても是よりまさる事もや
- 3 とおぼし成ぬかのすまハ昔こそ人の栖なども有
- 4 けれ今ハいと里離れ心すごくてあまの家だに
- 5 稀になんど聞給へど人しげくひたゝけたらん
- 6 住みハいとほいなかるべしさとて都を遠ざ
- 7 からんも古里おぼつかなかるべきを人わるくぞおぼし
- 8 みだるゝよろづの事きしかた行すゑ思ひつゝ
- 9 け給ふにかなしき事いとさま／＼也憂物と思ひ捨

(1 ウ)

- 1 つるよも今ハと住はなれなん事をおぼすにハいと
- 2 捨がたき事おほかる中にも姫君の明暮にそへて
- 3 ハ思ひなげき給へるさまの心ぐるしうあはれなる
- 4 を行めぐりても又あひみん事を必とおぼさん
- 5 にてだに猶二日[ミセケチ]三日の程よそ／＼に明しくらす
- 6 おり／＼だにおぼつかなき物におぼえ女君も心ぼ
- 7 そうのミ思ひ給へるをいくとせ其程と限り有道
- 8 にもあらず逢をかぎりにへだゝりゆかんも定め
- 9 なき世にやがてわかるべきかどでにもやといミじく

(2 オ)

- 1 おぼえ給へバ忍びてもろ共にもやとおぼしよるお
- 2 りあれどさる心ぼそからん海づらのなみ風より
- 3 外に立まじる人もなからんにかくらうたき御さま
- 4 にて引ぐし給へらんもいとつきなく我心にも中／＼
- 5 物思ひのつまなるべきをなどおぼしかへすを女君ハいミ
- 6 じからん道にもをくれ聞えずだにあらバとおも
- 7 むけてうらめしげにおぼひたりかの花ちる里にも

- 8 おハしかよふことこそ稀なれ心ぼそく哀れ[ミセケチ]
 9 なる御[ミ]有様を此御かげにかくれて物し給へバおぼし
 (2ウ)
 1 なげきたるさまいとことハリ也なをさ[不濁点]りにてもほ
 2 のかに見奉かよひ給ひし所々^ゝ 人しれぬ心にく
 3 だき給ふ人ぞおほかりける入道の宮よりも物の
 4 聞えや又いかゞ取なされんと我御為つゝましけれど
 5 忍びつゝ御とふらひつねにあり昔かやうにあひおぼ
 6 し哀をもミせ給ハましかバと打おもひ出給にさも
 7 さま／＼^ゝ に心をのミつくすべかりける人の御契り
 8 かなとつらく思ひ聞え給三月[ヤヨイ]廿日あまりの程になん
 9 都はなれ給ける人にいまとしもしらせ給はず只

(3オ)

- 1 いとちかうつかうまつりなれたる限[カギリ]七八人ばかり御供
 2 にていとかすかに出立給ふさるべき所ゞに御文斗
 3 打忍び給ひしにも哀と忍ぶるばかりつくひた
 4 まへるハ見所^ゝ もありぬべかりしかど其折の心ま
 5 ぎれにはか／＼^ゝ しうも聞をかず成にけり二三
 6 日かねて夜にかくれて大いとのにわたり給へり
 7 あんじろの車のう[ミセケチ]ち[ミセケチ]やつれたるにて女車^ゝ の
 8 やうにてかくろへいり給ふもいと哀に夢とのミ
 9 見ゆ御かたいとさびしげに打荒たる心ちして

(3ウ)

- 1 わか君^ゝ の御めのとども昔さふらひし人の中にまか
 2 でちらぬ限[カギリ]かく渡給へるをめづらしがり聞えて
 3 まうのほりつどひてみ奉るにつけても殊に物
 4 ぶかゝらぬわかき人々^ゝ さへよのつねなさ思ひしられ
 5 て涙にくれたりわか君^ゝ はいとうつくしうてざれ
 6 はしりおハしたりひさしき程に忘れぬこそ
 7 哀なれとてひぎにすへ給へる御[ミ]気色忍びがた
 8 げ也おとゝ^ゝ こなたにわたり給てたいめし給へり
 9 つれ／＼^ゝ にこもらせ給へ[るイ]らん程なにと侍らぬ昔物

(4オ)

- 1 語も参きて聞えさせんと思ふ給へれど身のやまひ
 2 をもきにより大やけにもつかうまつらず位をもかへ
 3 し奉りて侍にわたくしぎまにハこしのべてなん

- 4 どものゝ聞えひが／＼しかるべきを今ハ世中はゞかる
- 5 べき身にも侍らねどいちはやき世のいとおそろ
- 6 しう侍也かゝる御ことを見給ふ[ミセケチ]る[ミセケチ]に付て命
- 7 ながきハ心うくおもひ給へらるゝ世の末にも侍る
- 8 哉天下[アメノシタ]をさかさまになしても思ひ給へよらざり
- 9 し御[ミ]有様をみ給[補入へ]ればよろづいとあぢきなく

(4 ウ)

- 1 なんと聞え給ひ[ミセケチ]ていたうしほたれ給とある事も
- 2 かゝる事も前[サキ]の世のむくひにこそ侍なればいひもてゆ
- 3 けバたゝゞミづからのをこたりになん侍さしてかく官[クワン]
- 4 爵[サク]をとられずあさはかなる事にかゝづらひてだに
- 5 大やけのかしこまりなる人のうつしぎまにて世
- 6 中にありふるハとがをもきわざに人の国にもし侍
- 7 なるを遠くはなちつかハすべき定めなども侍る
- 8 なるハさまことなる罪にあたるべき[補入に]こそ侍なれ濁[ニゴリ]
- 9 なき心にまかせてつれなく過し侍らんもいと

(5 オ)

- 1 はゝゞかりおほく是よりおほきなるはぢにのぞま
- 2 ぬさきに[補入此]世をのがれなんと思ふ給へ立ぬるなどこ
- 3 まやかに聞え給昔の御[ミ]物語院の御事おぼしのたま
- 4 ハせし御[ミ]心バへな[ミセケチ]と[ミセケチ]聞え出給ひて御なをしの袖も
- 5 え引はなち給ハぬに君もえ心づよくももてなし
- 6 給はずわか君の何心なくまぎれありきて是
- 7 かれに馴聞え給をいみじとおぼいたり過侍にし
- 8 人をよに思ひ給へわするゝよなくのミ今にかなしミ
- 9 侍を此御事になんもし侍[補入る]よならましかゞいか

(5 ウ)

- 1 やうに思ひなげき侍らましよくぞみじかくてかゝ
- 2 る夢をミズ成にけると思ひ[ミセケチ]給へなぐさめ侍る
- 3 おさなく物し給がかくよハひ過ぬるなかにとゝゞ
- 4 まり給[補入ひ]てなづさひ聞えぬ月日やへだゞり給ハん
- 5 と思ひ[ミセケチふ]給ふ[ミセケチ]るをなんよろづの事よりも悲しう
- 6 侍るいにしへの人も誠にをかしあるにてかゝる
- 7 事にあたらざりけり猶さるべきにて人の
- 8 みがとにもかゝるたぐひおほふ侍気[ハンベリケリ]されどいひい
- 9 づるふし有てこそさる事も侍けれとさ[不濁点]まかう

(6 オ)

- 1 ざま[補入に]思ひ[ミセケチ]給へよらん方なくな[ミセケチ]ん[ミセケチ]などおほくの御
[ミ]物
- 2 かたり聞え給三位[補入の]中将も参あひ給て御ミきな
- 3 どまいり給に夜更ぬればとまり給て人に[ミセケチ人^ゝ]御[ヲ]
- 4 まへ[前]にさふらハせ給て物語などせさせ給人より
- 5 ハこよなう忍ひ[ミセケチ]おぼす中納言の君いへバえにか
- 6 なしうおもへるさまを人しれず哀とおぼす人
- 7 皆しづまりぬるに取分てかたらひ給是に
- 8 よりとまり給へるなるべし明ぬれば夜ふかう[ミセケチく]
- 9 いで給[補入ふ]に有明の月いとおかしう花の木どもやう／＼

(6 ウ)

- 1 盛過てはつかなる木陰のいと[補入おもイ]しろきに庭に
- 2 うすく霧わたりたるそこハかとなく霞
- 3 あひて秋の夜の哀におほく立まされりすみの
- 4 かうらんにをしかゝりてとばかりながめ給中納言の君
- 5 見奉りをくらんとにや妻戸^ゝをし明てみたり又
- 6 たいめんあらん事こそ思へばいとカタけれかゝりける
- 7 世をしらで心やすくも有ぬべかりし月比^ゝをさし
- 8 もいそがてへだてしよなどの給へバ物も聞えずなく
- 9 わか君^ゝの御めのとの宰相の君して宮のおまへ

(7 オ)

- 1 より御せうそこ聞え給へりミづからも聞えまほし
- 2 きをかきくらすみだり心^ゝちためらひはべる程に
- 3 いと夜ふかく出させ給なるもさまかはりたる心ち
- 4 のミし侍る哉心ぐるしき人のいぎたなき程
- 5 ハしバしもやすらはせたまハでと聞えたま
- 6 へれば打泣給て
- 7 鳥べ山もえし煙もまがふやとあまの塩やく
- 8 うらみにぞ行御かへりともなくうちずんじ給[ミセケチ]て
- 9 暁の別ハかうのミヤ心盡^ゝしなる思ひ知給へる

(7 ウ)

- 1 人もあらんかしのたまへバいつとなく別と云文字
- 2 こそうたて侍なる中にもけさハ猶たぐひ有ま
- 3 じう思ひ給へらるゝ程かなとはなごゑにてげに
- 4 浅からずおもへり聞えさせまほしき事も返ゝ[不濁点]

5 思ふ給へながらたゞにむすほぼゞ[不濁点]れはべる程をしは
 6 からせ給へいぎ[補入た]なき人ハ見給へんに付ても中／＼
 7 うき世のがれがたう思ふ給へられぬべければ心づ
 8 よう思ふ給へなしていそぎまかで侍ると聞え給
 9 出給程を人々ゝのぞきて見奉る入がたの月いと
 (8オ)

1 あかきにいとゞなまめかしうきよらにて物を
 2 おぼひたるさま虎おほかみだになきぬべしま
 3 していハけなくおハせし程よりミ奉初てし
 4 人々ゝなればたとしへなき御[ミ]有様をいミじとおもふ
 5 まことや御かへり
 6 なき人の別やいとゞへだゞ[不濁点]らん煙と成し
 7 雲井ならでハ取そへて哀のミつきせずいて給
 8 ぬる名残ゆゞしきまでなきあへり殿におハし
 9 たれば吾御かたの人々ゝもまどろまざりけるけし
 (8ウ)

1 きにて所／＼にむれみてあさましとのミ世を思
 2 へるけしきなりさふらひにハしたしうつかうま
 3 つる限ハ御ともにまいるべき心まうけしてわた
 4 くしの別おしむ程にや人目もなしさらぬ人ハとふ
 5 らひ[補入に]まいるもおもきとがめありわづらハしき事ま
 6 されバ所せくつどひし馬車のかたもなくさびし
 7 きに世ハうき物也けりとおぼししらるだいはん
 8 などもかたへハ塵バミてたゞミ所／＼引かへしたる[リイ]
 9 みる程だにかゝりましていかに荒ゆかんとお
 (9オ)

1 ぼす西のたいにわたり給へればみかうしもまいら
 2 でながめあかし給ひければすのこなどにわかきわら
 3 ハべ所々ゝに臥て今ぞ起きハぐとのゐすがた共ゝお[ミセケチ]
 4 おかしうて出入を見給ふにも心ぼそうとし月へバ
 5 かゝる人々ゝもえしも有果でやゆきちらんなど
 6 さしも有まじき事さへ御めのミとまりける
 7 よべハしか／＼して夜更にしかバなんれいのおもはず
 8 なるさまにやおぼしなしつるかくて侍る程だに
 9 御めがれずとおもふをかくよをはなるゞきハにハ
 (9ウ)

- 1 心ぐるしきことのをのづからおほかりける[補入を]ひたや
- 2 ごもりにてやハつねなき世に人にも情なき物と
- 3 心をかれはてんもいとおしうてなど聞え給へバかゝ
- 4 る世をみるより外におもはずなる事ハ何事
- 5 にかとばかりのたまひていミじとおぼし入たるさ
- 6 ま人よりことなるを理りぞかしちゝみこはいと
- 7 をろかに[補入]もとよりおぼしつきにけるにまして
- 8 世の聞えをわづらハしがりてをとづれ聞え給ハ
- 9 ず御弔[トフラ]ひにた[ミセケチ]に[ミセケチ]渡り給ハぬを人のみるらん

(10 オ)

- 1 ことも恥[ハヅカ]しう中／＼しられ奉らでやみなましを
- 2 まゝ母の北の方などの俄なりしさいはいのあはたゝ
- 3 しさあなゆゝしやおもふ人かた／＼につけて別
- 4 給ふ人かなとのたまひけるをさるたより有てもり
- 5 きゝ給にもいミじう心うければ是よりもたえ
- 6 て音徒聞え給はず又たのもしき人もなくげ
- 7 にぞ哀なる御[ミ]有様なる猶よにゆるされがたうて
- 8 年月をへバ巖の中にもむかへ奉らんとゝ今ハ
- 9 人きゝのいとつきなかるべきも[ミセケチ也]大やけにかしこ

(10 ウ)

- 1 まり聞ゆる人ハあきらかなる月日の影をだ
- 2 にみずやすらかに身をふるまふ事もいとつミを
- 3 もかん也あやまちなけれどさるべきにこそかゝる
- 4 事もあめれと思ふにまして思ふ人ぐするハ
- 5 れいなき事なるをひたおもむきに物ぐるおしき
- 6 世にて立まさる事も有なんなど聞えしらせ
- 7 給日たくるまておほとのごもれり[リ]帥[ソチ]の宮三位中
- 8 将などおハしたりたいめし給ハんとて御なをし
- 9 など奉る位なき人ハとてむもんの御なをし

(11 オ)

- 1 中々いとなつかしきをき給ひて打やつれ給へる
- 2 いとめでたし御びんかき給ふとてきやうだいに
- 3 寄給へるにおもやせ給へる影の我ながらいとあてに
- 4 きよらなればこよなうこそおとろへにけれ此
- 5 影のやうにややせて侍る哀なるわざ哉とのた
- 6 まへバ女君 涙をひとめうけてみをこせ給へるいと

7 忍びがたし

8 身ハかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ

9 かゝゝミの影ハはなれじと聞え給へバ

(11 ウ)

1 別れても影だにとまる物ならバかゝゝみをみて

2 もなぐさめてまし柱がくれにみ隠ゝて泪をま

3 ぎらハし給へるさま猶こゝらみる中にたぐひな

4 かりけりとおぼししらるゝ人の御[ミ][補入あり]さま也みこハ哀な

5 る御[ミ]物語聞え給てくるゝ程にかへり給ぬ花ちる里

6 の心ぼそげにおぼしてつねに聞え給ふもことハ

7 りにてかの人も今一度みずハつらしとやおもはん

8 とおぼせハ其夜ハ又出給ふ物からいと物うくて

9 いたうふかしておハしたれば女御かくかずまへ

(12 オ)

1 給て立よらせ給へることゝよろこび聞え給さまか

2 きつゝけんもうるさしいといみじく心ぼそき

3 御[ミ]有様たゝゝ此御がけにかくさ[ミセケチ]れてすぐい給へる年

4 月いとゝゝ荒まさらんほどおぼしやられて殿の内

5 いかすか也月おぼろに指出て池ひろく山木ぶ

6 かきわたり心ぼそげにミゆるにもすみはなれた

7 らん岩ほの中[ナカ]おぼしやらるにしおもて[補入に]ハかうしもわ

8 たり給はずやとうちくつしておぼしけるに哀

9 そへたる月影のなまめかしうしめやかなるに

(12 ウ)

1 打ふるまひ給へるにほひにる物なくていと忍びや

2 かに入給へバすこしゐざり出てやがて月を見てお

3 はす又こゝに御[ミ]物がたりの程に明方ゝちかう成にけり

4 ミじかのよの程やかばかりのたいめんも又ハえしも

5 やとおもふこそことなしにてすぐしつる年比ゝも

6 くやしうきし方行さきのためしに成ぬべき身

7 にて何となく心のとまるよなくこそ有けれと過

8 にしかたの事共ゝのたまひて鳥もしバ／＼なけば

9 よにつゝミていそぎ出給ふれいの月の入はつるほ

(13 オ)

1 だよそへられて哀也女君ゝのこき御ぞに移り

2 てげにぬるゝがほなれば

- 3 月影のやどれる袖ハセバく共とめてもみバヤ
- 4 あかぬひかりをいミじとおぼいたるが心ぐるしければ
- 5 かつハなぐさめ聞え給ふ
- 6 行めぐりつみに澄べき月影のしバしくもらん
- 7 空な眺そおもへバはかなしやたゞしらぬ泪のミこそ心
- 8 をくらす物なれな[ミセケチ]とのたまひて明ぐれの程に出
- 9 給ぬよろづの事共ゝしたためさせ給したしうつ

(13 ウ)

- 1 かうまつりよになびかぬ限の人々ゝとのゝ事とりおこ
- 2 なふべきかミしも定めをかせ給御ともにしたひ聞
- 3 ゆる限りハ又えり出給へりかの山里ゝの御栖の具ゝハえさ
- 4 らずとりつかひ給べき物ども殊更よそひもなくこと
- 5 そぎて又さるべき文ども文ゝ集ゝなど入たる箱さ
- 6 てハきんひとつぞもたせ給所せき御でうど花や
- 7 かなる御よそひなどさらにぐし給はずあやしの
- 8 山がつめきてもてなし給[ミセケチ]さふらふ人々ゝよりはじ
- 9 めよろづの事ミなにしのたいに聞えわたし給

(14 オ)

- 1 りや[ラウ]うじ給み荘[サウ]ミまきよりはじめてさるべき所／＼ゝの
- 2 券[ケン]などミな奉り置給それより外のみくらまちお
- 3 さめ殿ゝなどいふことまで少納言をはか／＼ゝしき物に
- 4 みをき給へればしたしき家[[不濁点]ケイ]司[シ]どもぐしてしろし
- 5 めすべきさま共ゝのたまひあづくわが御かたのなかづ
- 6 かさ中将などやうの人々ゝつれなき御[ミ]もてなしながら
- 7 見奉る程こそなぐさめつれ何事につけてかど
- 8 思へども命有て此世に又かへるやうもあらんを待
- 9 つけんとおもはん人ハこなたにさふらへとの給

(14 ウ)

- 1 ひてかミしもみなまうのぼらせ給ふわか君ゝの御
- 2 めのとたち花ちる里などにもおかしき様ハさる
- 3 物にてまめ／＼しき筋におぼしよらぬことなし
- 4 内侍のかミの御もとにわりなくして聞え給とハせ給ハ
- 5 ぬもことハりに思ふ給へながら今ハと世を思ひはつ
- 6 る程のうさもつらさもたぐひなき事にこそ
- 7 侍けれ
- 8 あふせなき泪の川にしづミしやながるゝ

9 ミおのはじめなりけんと思ふ給ふ[ミセケチ]る[ミセケチ]を[ミセケチ][へ出る]のみなん
つミ

(15 オ)

- 1 のがれがたう侍ける道の程もあやうければこまか
- 2 には聞え給はず女いといミじく覚[ヲボ]え給て忍び
- 3 給へど御袖よりあまるも所せうなん
- 4 泪川^ゝうかふ[不濁点]みなハも消ぬべしながれて後のせを
- 5 もまたずて[不濁点]なく／＼みだれかき給へる御手いとお
- 6 かしげ也今一[ヒト]度[タビ]たいめなくてやとおぼすハ猶口惜け
- 7 れどおぼし返してうしとおぼしなすゆかりおほふて
- 8 おぼろけならず忍び給へばいとあながちにも聞え給ハ
- 9 ず成ぬあすとての暮にハ院の御はかおがミ奉給

(15 ウ)

- 1 とて北山へまうで給暁かけて月出る比なれば
- 2 先入道宮にまうで給近きみすのまへにおまし
- 3 まいりて御[ン]ミづから聞えさせ給東宮の御事をいミ
- 4 じょうしろめたき物に思ひ聞え給かたみに心
- 5 ぶかきどちの御[ミ]物語^ゝハたよろづのあはれまさり
- 6 けんかしなつかしうめでたき御[ミ]けハひの昔に
- 7 かはらぬにつらかりし御[ミ]心バへもかすめ聞えさせま
- 8 ほしけれど今さらにうたてとおぼさるべしわが
- 9 御[ミ]心にも中／＼[補入今]一きハみたれまさりぬべければ

(16 オ)

- 1 ねんじかへしてたゝかく思ひかけぬ罪にあたり侍
- 2 も思ふ[ミセケチ]給へ[ミセケチ]あはすることの一ふしになむ空もおそろ
- 3 しょう侍おしげなき身ハなきになしても宮の
- 4 御世だにことなくおハしまさバとのミ聞え給ぞ理な
- 5 るや宮もみなおぼししらるゝ事にしあれば御[ミ]心
- 6 のミうごきて聞えやり給はず大将よろづの事
- 7 かきあつ[補入め]おぼしつゝ^ゝけてなき給へる気色いとつ
- 8 きせずなまめきたり御[ミ]山に参侍を御ことつてやと
- 9 聞え給にとみに物も聞え給はずわりなくためら

(16 ウ)

- 1 ひ給御[ミ]けしきなり
- 2 みしはなく有ハかなしき世の果をそむき
- 3 しかひもなく／＼ぞふるいミしき御[ミ]心まどひ共^ゝに

4 おぼしあつむる事共ゝ えぞつゝゝ けさせ給ハぬ
 5 別しに悲[カナ]しき事ハつきにしを又ぞ此世の
 6 うさハマされる月待出て出給御供にたゝ 五六人
 7 斗しも人ゝ もむつましき限して御馬にてぞおハする
 8 さらなる事なれど有し世の御[ミ]ありきにこと也
 9 ミないとかなしうおもふ中に彼御[ミセケチミ]そぎのひかりの
 (17 オ)

1 ミずいじんにてつかうまつ[補入れ]りし右近のぞうの蔵人うべ
 2 きかうふりも程過つるをつみにみふだけづら[ラ]れつか
 3 さもとられてはしたなければ御供に参うち也賀茂
 4 の下のミやしろをかれとみ渡す程ふと思ひ出られ
 5 ておりて御馬の口をとる
 6 引つれてあふひかざしゝ そのかみを思へハつらし
 7 かものミづがきと云をげにいかに思ふらん人よりげに
 8 花やかなりし物をとおぼすも心ぐるし君も御馬
 9 よりおり給てみ社のかたおがみ給と[ミセケチ]て[ミセケチ]神にま
 (17 ウ)

1 かり申し給ふ
 2 うき世をバ今ぞわかるゝとゝゝ まらんをバたゝゝ すの
 3 神に任せてとの給さま物めてするわかき人にて
 4 ミにしみて哀にめでたしとみ奉る御[ミ]山にまうで
 5 給ておハしましゝ 御[ミ]有様只めのまへのやうにおぼし
 6 出らる限なきにても世になく成ぬる人ぞいはん方
 7 なく口惜きわざ也ける万の事をなく／＼申給て
 8 も其理りをあらはにえ承給ハねばき斗ゝ おぼし
 9 のたまハせし様々の御[ゴ]ゆいごんハいづちか消失にけん
 (18 オ)

1 といふかひなし御[ミ]はかハ道の草しげく成て分入給
 2 程いとゝゝ 露けきに月も雲がくれて森の木立ゝ [補入木]ぶ
 3 かく心すごしかへりいでん方もなき心ちしておがみ
 4 給に有し御佛さやかにみえ給へるそゝゝ ろさむきほ
 5 どなり
 6 なき影やいかゝゝ みるらんよそへつゝ なかむる月も
 7 雲隠ゝ ぬる明果る程に帰給[補入ひ]て春宮にも御せう
 8 そこ聞え給ふ王命婦ゝ を御かハリとてさふらハせ
 9 給へバそのつぼねにとてけふなん都はなれ侍る

(18 ウ)

- 1 又参侍らず成ぬる南あまたのうれへにまさりて
- 2 おもふ給へられ侍るよろづをしばかりて〔イ〕けいし
- 3 給へ
- 4 　　いつか又春の都の花を見む時うしなへる山賤
- 5 にして桜の散透たる枝に付給へりかくなんと御
- 6 覧ぜさすればおさなき御〔ミ〕心ちにもまめだちておハシ
- 7 ます御返りいかゞ物し給らんとけいすればしバしみ
- 8 ぬだに恋しき物を遠くハマしていかにといへかし
- 9 とのたまハす物はかなの御返やと哀にみ奉るあぢ

(19 オ)

- 1 きなき事に御〔ミ〕心をくだき給し昔の事おり／＼の
- 2 御〔ミ〕有様思ひつゞけらるゝにも物おもひなくて我も人
- 3 もすぐい給ひつべかりける世を心とおぼし歎ける
- 4 を悔しうわが心ひとつにかゝらんことのやうにぞおぼゆ
- 5 る御かへりハさらに聞えさせやり侍らず御〔マ〕前にハけい
- 6 し侍ぬ心ぼそげにおぼしめしたる御〔ミ〕気色もい
- 7 ミしうなんとそこはかたなく心の乱けるなるべし
- 8 　　咲てとくちるハうけれど行春ハ花の都を立
- 9 かへりみよ時しあらばとのミ聞えて名残も哀

(19 ウ)

- 1 なる物語をしつゝひと宮〔補入ノ〕内忍びてなきあへり一めも
- 2 み奉〔補入れ〕る人ハかくおぼしくづをれぬる御〔ミ〕有様をなげき
- 3 おしミ聞えぬ人なしましてつねに参馴たりしハしり
- 4 をよび給まじきおさめみかハやうとまで有がたき御
- 5 かへりミの下なりつるをしバしにてもみ奉らぬほどや
- 6 へんと思ひなげきけり大かたの世の人も誰かハよろし
- 7 く思ひ聞えんなゞつに成給し此かたみかどの御〔マ〕前に
- 8 よるひるさふらひ給てそうし給ことのならぬハなか
- 9 りしかバ此御いたハりにかゝらぬ人なく御とくをよ

(20 オ)

- 1 ろこばぬやハ有しやんごとなきかんだちめ弁官な
- 2 どの中にもおほかりそれよりしもハ数しらぬ〔ズイ〕を思ひ
- 3 しらぬにハあらねどさしあたりていちハやきよを思ひ
- 4 はゞかりて参よるもなしよゆす〔不濁点〕りておしみ聞え
- 5 下にハ大やけをそしり恨奉れど身を捨て弔〔トムラ（左に）〕ひ

- 6 参らんにも何のかひかハとおもふにやかゝるおりハ
- 7 人わろくうらめしき人おほく世中ハあぢきなき
- 8 物かなとのミよろづに付ておぼす其日は女君^ゝに御[ミ]
- 9 物語のどかに聞えくらし給てれいの夜ふかく出給

(20 ウ)

- 1 かりの御ぞなど旅の御よそひいたくやつし給て月
- 2 出にけりな猶すこし出てみだにをくり給へかし
- 3 いかにも聞ゆべき事おほく積りにけりとおぼえんと
- 4 すらん一日[ヒトヒ]二日[フツカ]玉さかにへだつる折だにあやしく
- 5 いぶせき心ちする物をとてみす巻あげてはし
- 6 にいざなひ聞え給へバ女君^ゝ泣沈給へるためらひてゐ
- 7 ざりいで給へる月影にいミじく[ミセケチウ]おかしげにてゐ給
- 8 へり我身かくてハかなきよを別なバいかなるさまに
- 9 さすらへ給はんとうしろめたくかなしけれどおぼし

(21 オ)

- 1 入たるがいとゝ^ゝしかるべければ
- 2 いける世の別をしらで契つゝ命を人に限ける
- 3 哉はかなしなとあさハかに聞えなし給へバ
- 4 惜からぬ命にかへてめの前の別をしバしとゝ^ゝ
- 5 めてしがなげにさそおぼさるらんといと見捨がたけ
- 6 れど明終[ハテ]なバはしたなかるべきによりいそぎ出
- 7 給ぬ道すがら佛につとそひてむねもふたがり
- 8 ながら御舟に乗給ぬ日永き比なればをひ風さへ
- 9 そひてまださるの時ばかりにかの浦につき給ぬ

(21 ウ)

- 1 かりそめの道にてもかゝる旅をならひ給ハぬ心
- 2 ちに心ぼそさもおかしさもめつらか也大江殿といひ
- 3 けるところはいたうあれて松ばかりぞしるしなりける
- 4 から国に名を残しける人よりも行ゑしられ
- 5 ぬ家ゐをやせんなぎさによる浪のかつかへるを見
- 6 給てうら山しくもと打ずんじ給へる[補入さま]さるよの
- 7 ふることなれどめづらしく聞なされかなしとのミ御
- 8 ともの人々^ゝおもへりうちかへり見給へるにこしかたの
- 9 山[補入の]ハ霞はるかにて誠に三千^ゝ里の外の心ちするに

(22 オ)

- 1 かひの雫もたへがたし

2 古里を峯の霞ハへだつれどながむる空ハ同じ雲

3 みか[不濁点]つらからぬ物なくなむ

注

- 注 1) 整理番号：貴 3201/60B。ソウル大学校中央図書館学内関係者向けデータとしてデジタル画像 (<http://sdl.snu.ac.kr/DetailView.jsp?uid=100&cid=560332>) がある。
- 注 2) 2017 年 9 月 22 日。それ以前および以後はデジタル画像をもって研究を行った。呉は 2011 年にも原本調査を行っている。
- 注 3) 中島和歌子氏『首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察(上)：山稜参拝と『白氏文集』の諷諭詩(『札幌国語研究』5、2000 年 11 月)に習い、光源氏が須磨に到着してからの「おはすべき所は行平の中納言の(22 才)」以降を後半とし、それ以前を前半とする。
- 注 4) 『日本語学研究』54 (韓国日本語学会、2017 年 12 月)
- 注 5) 若菜上巻以降の書き込みはほぼ見られない。柏木巻末や東屋巻の長文の異文も見られない。
- 注 6) 原本調査の折、斎藤達哉氏にご教授いただいた。
- 注 7) 大槻信氏「古代日本語のうつりかわり：読むことと書くこと」(京都大学文学研究科編『日本語の起源と古代日本語』臨川書院、2015 年 3 月)
- 注 8) 加藤洋介氏「大島本源氏物語の本文成立事情：若菜下巻の場合」(中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』(和泉書院、2009 年 10 月)
- 注 9) 『日本大学蔵源氏物語』3 (八木書店、1995 年 1 月)、『大島本源氏物語』3 (角川書店、1995 年 5 月)、『源氏物語(絵入)〔承応版本〕』(岩波書店、1999 年 7 月)、『首書源氏物語須磨』(和泉書院、1994 年 5 月)、『湖月抄』(国立国会図書館デジタルライブラリー、ID 000007292618) を用いた。
- 注 10) 補入、見せ消し等は含めず計算した。47 ウは平均に入れていない。
- 注 11) 「散り過ぐ」と解する注釈書は現在もあり解釈が分かれているが、早く『細流抄』に「ちりすきたるとは散透也」とある。
- 注 12) 池田亀鑑『源氏物語大成』(中央公論社、1951 年) 略号もそのまま用いた。須磨巻は青表紙 6 本、河内本 5 本、別本 2 本である。
- 注 13) 『中古文学』94 ミニシンポジウム①(2014 年 11 月)にあるように、近時「青表紙本」「河内本」「別本」という分類の批判的検討が進んでいるのを承知しているが、大まかな傾向分析に用いた。
- 注 14) 加藤洋介氏『源氏物語大成』の三条西家本(『詞林』42、2007 年 10 月)に大島本の三条西家本は天理大学蔵本であったことが指摘されている。以後の検討は、日本大学蔵の三条西家証本で行った。そのため『大成』403 頁 8 行目「むもんのなをし」は「むもんの御なをし」、431 頁 1 行目「めでたしかし女は」は「めでたしかく女は」など、日大本との違いも見受けられた。
- 注 15) 注 4 論文では「コト」と解したが、三条西家証本の傍記「てイ」の「て(天)」を写したようにも見える。
- 注 16) 日大本の解説にも校合について「日大本の異本表記は何本によったか判らぬものもあったが、(中略)池田本・肖柏本を異本とみているなどの例もすこしみられた」とある。
- 注 17) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成続』第 3 巻(おうふう、2006 年 9 月)
- 注 18) 横山本によって書き入れをしたと思われる箇所は、他に 2 箇所ある。ソウル大本 22 ウ「すく(ミセケチゴ)さまし」、43 ウ「いね(補入ども)取出て」。訂正補入後の本文の変化は稿を改めて論じる。
- 注 19) 23 オ「入道の宮の」(日大本「の」補入)、24 ウ「真木柱 などを」(日大本「を」補入)、30 ウ「哀とおぼし入りて」(日大本「あはれと」補入)、40 オ「おはしまさせん」(日大本「せ」補入)
- 注 20) 「源氏物語本文の伝流と受容に関する試論：「須磨」における〈甲類〉と〈乙類〉の本文異同」(横井孝・久下裕利編『源氏物語の新研究：本文と表現を考える』新典社、2008 年 11 月)、「海を渡った古写本『源氏物語』：「須磨」の場合」(『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」』新典社、2013 年 10 月)伊藤鉄也氏の〈甲類〉〈乙類〉の分別では〈乙類〉になる。
- 注 21) 2 オ「なみ」(日大本「浪」)、8 オ「御かへり」(日大本「御返」)、8 オ「いて給ぬる」(日大本「出給ひぬる」)など。
- 注 22) 「[解説]『源氏物語』本文の構築」(『源氏物語』2、岩波書店、2017 年 11 月)

参考文献

- ・伊藤鉄也編『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」』(新典社、2013 年 10 月)

- ・池田亀鑑編『源氏物語大成』（中央公論社、1951年1月）
- ・池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』（笠間書院、1988年）
- ・呉美寧「ソウル大学校蔵『源氏物語』の書き込みについて」（韓国『日本語学研究』54、2017年12月）
- ・岡野道夫「証本源氏物語の本文について：日本大学図書館蔵本と宮内庁書陵部蔵本の性格」（『語文』21、1965年6月）
- ・大内英範『源氏物語 鎌倉末期本文の研究』（おうふう、2010年5月）
- ・大内英範「『青表紙本』が揺らいだ後：これからの源氏物語本文研究」（『文学・語学』206、2013年7月）
- ・加藤昌嘉『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年10月）
- ・加藤洋介『源氏物語大成』の三条西家本」（『詞林』42、2007年10月）
- ・加藤洋介「本文系統の認定をめぐる諸問題：書陵部蔵三条西家本源氏物語について」（『詞林』52、2012年10月）
- ・岸上慎二「源氏物語解題：三条西家伝之証本」『枕草子研究（続）』（笠間書院、1983年3月）
- ・京都大学文学研究科編『日本語の起源と古代日本語』臨川書院、2015年3月）
- ・源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』3（桜楓社、1990年10月）
- ・源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成続』3（おうふう、2006年9月）
- ・清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、2003年3月）
- ・高田智和、斎藤達哉『米国議会図書館蔵『源氏物語』について：書誌と表記の特徴』（『国立国語研究所論集』6、2013年11月）
- ・中古文学会関西西部会編『大島本源氏物語の再検討』（和泉書院、2009年10月）
- ・中島和歌子『首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察（上）：山稜参拝と『白氏文集』の諷諭詩」（『札幌国語研究』5、2000年11月）
- ・新美哲彦『源氏物語の受容と生成』（武蔵野書院、2008年9月）
- ・藤井貞和「【解説】『源氏物語』本文の構築」（『源氏物語』2、岩波書店、2017年11月）
- ・横井孝、久下裕利編『源氏物語の新研究：本文と表現を考える』（新典社、2008年11月）
- ・『講座源氏物語研究 第7巻 源氏物語の本文』（おうふう、2008年2月）
- ・『日本大学蔵源氏物語 三条西家証本』3（八木書店、1995年1月）

【謝辞】

資料の閲覧に際しご高配を賜り、画像掲載をお認めいただいたソウル大学校中央図書館の関係各位に篤く御礼申し上げます。